Bulletin of Nagano Women's Junior College Vol.10 1—24, 2003

善光寺と良寛の感応の世界

青 木 善 保

要 旨

いつの時代にも自分を救済してくれる何物かを人々は望んできた。近代人はニーチェがいうように「救済者」を失った。現代人はその新たな探究を達することができるだろうか。

『善光寺さん』、『良寛さん』の愛称は、日本的な救済の想像を可能にしてくれる。

奈良時代より古い歴史をもつ秘仏善光寺本尊。大勢の善光寺聖や信者が作り出した善光寺さんの信仰。参詣者の胸に心の安らぎを実感する善光寺。

良寛は、出家し優れた僧侶をめざして師国仙和尚と円通寺の修行に向う途上、師の印可の偈を受けてから十年余諸国行脚を経て帰郷の途上と、二度の善光寺参詣をする良寛。二度目の参詣には修行生涯の転機を内包している良寛。

従来の良寛研究では、重要な意味を持っていなかった良寛漢詩「再游善光寺」を手掛かりに、「善光寺と良寛の感応する世界」を、普遍な日本人の心を念頭に論考する。

キーワード　良寛の悟り ＜印可の偈　佛説教云＞　善光寺の魅力 ＜庶民信仰　創建の謎＞
日本人の心 ＜無私清明　純粋生命＞

I　良寛漢詩「再游善光寺」の背景

1　良寛漢詩「再游善光寺」

再游善光寺	再び善光寺に游ぶ
曽従先師游此地	曽て先師に従って　此の地に游ぶ
回首悠々二十年	首を回らせば　悠々二十年。
門前流水屋後嶺	門前の流水　屋後の嶺
風光猶似旧時妍	風光　猶　似たり旧時の妍。

かつて亡き国仙和尚とこの地に遊行したことがある
思い起せば二十年も昔のことだ。
門前の川の流れも本堂の後ろの峯も
その風景は昔のままの美しさだ。　注1

この漢詩には、「此の地に来る、二十有余年」の注釈がある。注2 また、「先師」を光照寺の玄乗破了和尚とする注釈がある。注3 さらに、

再游善光寺	再び善光寺に游ぶ
曽随先師游此地	曽て先師に随って　此の地に游ぶ
回首悠々二十年	首を回らせば　悠々たり二十年。
挟道青松遶檻山	道を挟む青松は　檻山を遶らし
風光無処不傷神	風光　処として神を傷まざらしむことなし

曽て今は亡き国仙和尚にお伴して／この地を訪れたことがある。

想いかえせば　遥かに二十年／参道を挟む　松の緑は

まわりの山並みをめぐって昔とかわらずはえている。

そんな風光の何もかもがその神（こころ）を思い起させてわしの心を包むのである。

飯田利行氏による漢詩及び注釈がある。注4

良寛詩碑「再游善光寺」は、善光寺境内仁王門の西側に、長野良寛会が子どもと遊ぶ良寛の心の敷衍を願い発起して、二千余の個人・団体の方々から寄せられた浄財、善光寺大本願のお力添えにより1991年3月3日に建立された。詩碑裏面には建立趣旨等を記している。

詩碑の漢詩は、『良寛草堂詩集貫華』より写した古金石文字といわれる独自の楷書で書かれている。この詩集は自筆所持本『良寛草堂詩集』から良寛が特に選んで、妹むら子に贈った詩集とされている。当時『良寛草堂詩集貫華』は、東京の小西康仁氏が所蔵していて、詩碑建立に協力をいただいた。

2　二十年前、国仙和尚と参詣する良寛

(1)　国仙和尚と出会うまでの幼年・少年期

良寛は、1758（宝暦8）年、出雲崎名主〈石井神社神官〉橘屋山本家〈平安時代末期頃より当地に住み、この地方を開拓して名主役を継いできた〉、父新左衛門〈俳号以南、与板庄屋新木家より婿〉母秀子〈佐渡相川橘屋山本家より養女〉の長男として生まれる。晩年和島村の木村家庵室において弟由之、弟子貞心尼に看取られ入寂1831。弟妹は、

二男由之〈号巣守。和歌や国学に造詣が深い。文法書「くらげの骨」、東北旅行記「由之日記」、日記「八重菊日記」などがある。良寛が出家後名主を継ぐ。失脚後諸国を旅する。晩年与板の松下庵に住み、木村家庵室の良寛と交流する。1834没〉

三男観山〈出家し、橘屋の菩提寺真言宗円明院の第十世快慶といった。1800没〉

四男香〈号澹斎。京都に上り、禁中の学師菅原長親の勧学館塾頭をつとめ、光格天皇の詩会にも侍坐した。当時、勤皇志士の集合地の東福寺に葬られている。1798没〉

長女むら子〈寺泊回船問屋外山文左衛門に嫁いだ。外山氏宛の手紙五通をみると、着物、食べ物など良寛の物心両面の世話をしている。1824没〉

二女たか子〈出雲崎の町年寄高島伊八郎に嫁ぎ、四男十女を育てる。1812没〉

三女みか子〈出雲崎浄玄寺曽根智現に嫁ぐ。老後剃髪して妙現尼といった。特に和歌にすぐれ、兄思いであった。歌や絵が遺されている。1852没〉注5

良寛の幼名栄蔵をしのばせる文献はほとんどない。素直で女の子のように毎日手毬やおはじきに興じ、お伽話に目を輝かしている。無口でぼんやりしており、消極的な非社交的人物のようで、「名主の昼行燈」と土地の人々は癡愚の人とかげ口をされていたが、読書だけは熱心で寝食を忘れて本に読みふけった姿が、後の少年追憶の漢詩から浮んでくる。

十三歳から名主役になる十八歳までの六年間、地蔵堂（現在の分水町）の大森子陽の狭川塾で学ぶ。大森子陽（1738—1791）江戸中期の儒者。当時の塾では、四書（大学・中庸・論語・孟子）五経（詩経・易経・書経・春秋・礼記）、唐詩選、小学、孝経、三字経などを扱っていた。記憶力知識力の旺盛な時期、儒教を通して道徳の基礎を教え込まれた。子陽の下で、何よりも暖かい素直な人間性を大切にすべきことを、強く教えられた。

富取之則〈地蔵堂の人。江戸に出て儒者となる。良寛と親交を深める〉、原田鵲斎〈医師。国上村真木山の庄屋。漢詩・和歌・俳諧にすぐれ、良寛と深く交わる〉、橘彦山〈三条の人崑崙の兄。詳細不明〉が学友だという。注6

元服して十六歳頃から名主見習文孝を名乗り、急に世間の荒波に投げ出された。

十八歳のとき、いったん名主職を継ぐが、すぐ家を捨て、出雲崎の光照寺へ入り、住職第十二世玄乗破了のもとで剃髪する。その先住は第十一世蘭谷万秀で、橘屋とは親戚の関係にあり、以南は良寛が出家断念の説得することを依頼したともいわれている。しかし出家の直接の動機は判然としない。無常を感じ仏門に入る例は、出家して人生の本質を究明した吉田兼好〈徒然草〉、西行〈山家集〉、鴨長明〈方丈記〉の例がある。

二十二歳の時、大忍国仙和尚（備中玉島円通寺第十世）は、光照寺へ巡錫した。1779年初夏、弟子玄乗破了の晋山結制と授戒会を兼ねて門人大心を従えて越後入りした。結制は5月行われ、解制は8月といわれている。この間に良寛が温順で将来の大器であると見た玄乗破了、蘭谷万秀は、師国仙和尚に門弟として育成することを託したのかもしれない。良寛から強く願い出たともいわれている。良寛は国仙和尚の弟子となり、師に従って玉島に赴くことになる。安永8年9月、初秋の光照寺、父母弟妹のいる故郷出雲崎を後にする。

父がかたるらく　よをすてし／すてがひなし　世の人に／
いはるなゆめと　いひしこと／今もきくこと　おもほえぬ／（出家の歌の一部）

(2)　「曽て先師に従って　此の地に游ぶ」二十二歳の良寛

二十年前とは、師国仙和尚と良寛が備中玉島円通寺へ向う途上のこと考えている。足どりを

示す、信州善光寺―木曽街道―京都へ向う説、また善光寺―江戸―東海道―京都への説などあるが、「良寛が先師国仙和尚と共に、善光寺を詣でたのはこの折であったという確証は何もない。」亡母秀子三回忌の追善に一時帰郷したのではないかの指摘もある。注7

国仙和尚は武蔵国岡村に生まれ（1723、享和８年）、幼少のころは名山巨刹に住し生涯枯淡に徹し当代有数の師家、清涼寺第九世高外全国に育てられた。国仙は二十歳前に印可証明を受け、師全国に死別後、多年諸国を行脚して研鑽し、三十歳で大本山永平寺へ瑞世して和尚位になり、武蔵府中の大泉寺の住職、後に相模の勝楽寺住職から備中玉島円通寺第十世に昇住（1769、明和６年）する。四十七歳の時円通寺入りした国仙は寺内の諸堂を再興し、全国の百か寺の常恒会をもつ寺格の昇格に尽くした。隠退せず六十九歳示寂（1791、寛政３年）。門人30名はその学徳が広く慕われたためと伝えられている。良寛は29番目の弟子。良寛が剃髪した光照寺住職玄乗破了和尚は３番目の弟子に当たる。注8

越後から信州への街道を国仙和尚と良寛は歩いた。異郷の風物に驚きつつ、円通寺での修行を心に描いていたのだろう。

北国街道の柏原を経て善光寺につく。1779（安永８）年、初秋の善光寺は、大勢の参詣の人々で賑わっていた。師国仙和尚と参詣する二十二歳の良寛の胸は、天を衝かんばかりの意気に燃えていた。曹洞宗の優れた僧侶となることを描きながら、善光寺の金堂（現在の金堂は1717年に建立）など境内をめぐり、その全景を満喫して、心の奥に深く感じるものを得たのだろう。また、庶民信仰に曳かれて参籠して撞木式の善光寺金堂の内陣で一夜を明かしたかもしれない。

3　帰郷の途上、再び善光寺に参詣する四十二歳の良寛

(1)　師国仙和尚の会下で修行を徹底する良寛

良寛は善光寺参詣の後、師国仙和尚の因縁の深かった、信州の寺院をまわり、武蔵国岡村（国仙の生国）、府中の大泉寺、多摩川をわたり勝楽寺、そして江戸を経て東海道を上り、三河の医王寺（国仙の師高外全国の墓所）に参り、十月には大阪に着いたとされている。良寛は生まれて初めて二か月に及んだ長い旅を終えて備中玉島に入ったのは秋の終りを告げる頃だったろう。

良寛は円通寺に到着すると、新到としてまず旦過寮に入り、そして一週間の坐禅三昧を終えると、掛塔式の後、僧堂（坐禅堂）内に座席が指定された。続いて開山堂や諸堂、方丈、各寮などを「新到よろしゅう」と安居の挨拶をして廻った。

禅門では、ある期間一定の鋳型に入れて修行させ、心境がだんだん進むに従って、最初に嵌めた鋳型から自分で抜け出て、その人その人の力量に応じた風格へ移るように指導するのが、禅の教育方法として一般的であった。

円通寺では毎朝食後の坐禅が終ってから、日天作務といって堂の内外を掃除する。四と九の

日は大掃除をする。広い境内や参道まで入念に掃除した。さらに山作務といって、庭園の手入れ、薪の運搬、境内の破損した箇所の土木工事までした。当時、円通寺では朝夕百八声の梵鐘をついていたといわれ、坐禅は4回、食事は朝夕粥、昼食は麦飯、副食物は味噌汁・漬物・煮〆という簡素なものであった。注9

後の漢詩「憶在圓通時」には、「朝参　つねに徒に先んず」真面目一途に修行する良寛の姿がある。また社交性を好まず孤独の修行を詠んだ次ぎの漢詩がある。

圓通寺

自來圓通寺	圓通寺に来ってより	圓通寺へとやって来て
幾度経多春	幾度か　冬春を経たる	幾度年が　経ったやら。
門前千家邑	門前　千家の邑（ユウ）	町に多くの　家あれど
更不知一人	更に　一人を知らず。	知人というは　たれもなし。
衣垢手自濯	衣垢づけば　手自ら濯ひ	よごれた着物は手で濯（アラ）い
食盡出城闉	食尽くれば城闉（ジョウイン）に出づ	お米は町へ　托鉢に。
曽讀高僧傳	曽って　高僧伝を読む	けれどむかしの　高僧も
僧可可清貧	僧は清貧に可なるべし	貧しくあれと　さとされた。注10

古来優れた禅僧は、同時に教育者が多い。これは禅が、実践を主体として、単なる知識や観念の遊戯を排した、魂と魂の触れ合いを基調とするからである。師国仙和尚によって良寛は、単なる学僧ではない、優れた行僧（行仏）に高められた。良寛は、坐禅と学問と「行」との渾然融合の理想的存在にたどり着くことが出来たと考えられる。注11　国仙和尚の優れた教育は、仙桂、良寛にみられる体制を受け入れられない資質を育成したことにある。

国仙和尚によって当時触れることの出来ない『正法眼蔵』を読む。「自己をならうというは、自己をわするるなり」思いきって我執・執着を捨てなさい。自意識がなくなると宇宙の真実と一致する。それは自己の身心、他者の身心を「脱落せしむるなり」。良寛は坐禅と作務と読経を通して、仏道の本道を直覚していった。

道元禅師は臨終のとき『法華経』の一節を壁に書きとめている。釈尊が自らは永遠の生命をもち衆生を救い続ける、仏国土にするための久遠の思想―末法救済の教えを記す『法華経』を、良寛は熱心に読んだであろう。それは後年、道元禅師敬慕の涙を詠んだ長編の漢詩「読永平録」、遺墨「法華転」、「法華賛」などから想像できる。

国仙和尚は、入寂（1791、寛政3年3月18日）より数ヶ月前、良寛に、印可の偈と「大愚」の号と爛藤の杖を与えた。印可は師が弟子の悟道の熟達を証明し、偈は弟子の仏徳を讃える頌（ジュ）である。1790（寛政2）年、良寛三十三歳の冬であった。

附良寛庵主　　良寛庵主に附（アタ）う
良也如愚道転寛　　良や愚の如く　道転（ウタタ）寛（ヒロ）し
騰々任運得誰看　　騰々任運誰か看るを得ん。
為附山形爛籐杖　　為に附う　山形爛籐の杖。
到処壁間午睡閑　　到る処壁間　午睡閑なり。
寛政二庚戌冬　　水月老衲仙大忍　花押　　注12

師国仙和尚は次のように讃えている。良寛の大愚の如き騰々任運の深さは容易に知りえないほど良いものである。国仙の愛用している山から取った自然の爛籐の杖を贈る。如何なるところにあっても壁間の行往坐臥、壁に向う坐禅の閑雅を忘れるなよ。

寺院仏教に拘らない将来を予告する意味にも取れる偈である。この注釈には種々ある。師国仙和尚によって、良寛は道元の正法眼蔵に邂逅し、厳しい道元禅師の修行に徹底し、釈尊の教え『法華経』を究めていた。師国仙和尚の入寂を契機に諸国行脚の途についた。

(2) 帰郷を決意する良寛

相馬御風氏の「良寛小伝」の一部を読む。

「円通寺にあって修行すること前後を通じて約二十年、その間、中国・四国・九州の諸地方に行脚し、後京都に出で、伊勢に詣でなどして、四十歳を過ぎてから越後に帰った。なおその間に、良寛の母は郷里に病死し、父以南は、俳諧行脚にことよせ勤皇の大志を抱いて諸方を巡歴し、最後に京都に上って何事をか期するところであったが、ついに志を果さず、1795（寛政7）年7月25日桂川に身を投じて自殺を遂げた。」とある。注13

ここには良寛帰郷の理由は記されていないが、1799（寛政11）年四十二歳ごろ帰郷を考えると、父以南の自殺は、良寛の「円通寺中追放」を官権によって出された息子の不運が原因という説もあり、重要な出来事と考えられる。帰郷年次については諸説がある。

父以南は、芭蕉に傾倒して「北越蕉風中興の棟梁」と言われた。しかし名主を取り仕切る才能には恵まれなかった。失敗を重ねて斜陽化の橘屋を急転落させ、二男由之に名主を譲り、1793（寛政5）年、京都に上っての出来事であった。このことは、小林一茶の『株番』に「越後国の俳諧法師以南は脚気を悩みて、桂川の流れに身をすつる。」とある。

良寛は師国仙和尚の偈と父以南書の俳句に、

朝霧に　一段ひくし　合歓の花　　以南
水茎のあとは涙にかすみけり　ありし昔のことを思へば　　良寛

和歌を書いて生涯身につけていたという。諸国行脚の良寛は、印可証明を師国仙和尚より受けた後の身の処し方を深く考えていたに違いない。

良寛が、黙々と典座の「行」に徹している仙桂和尚に、会っていてもその真価にふれること

ができなかったことを悔恨する漢詩がある。仏道修行の目標と僧侶の寺院教団のあり方に違和感をもったのか。道元の教え、釈尊の教えに心眼を開いた良寛は、国仙和尚から一寺を与かる住職の資格となる印可の偈をうけて、さらに煩悶が加わったのではないか。

円通寺を出ての諸国行脚は、「哀傷、憤激、悔恨、奮起、苦悶、悲痛…さうしたさまざまな心状が、雑然として彼の内部をかき亂したろう。…如何なる悩み、如何なる苦しみの底にあっても、彼の魂はその還ることを忘れないまでに目覚めてゐた。」とある。注14

そして、宗派集団に入るか、只一人の道を行くかの厳しい葛藤の渦中にあったのではないかと考えられる。

僧伽

落髪為僧伽	落髪して僧伽となり	髪をおろして　僧となり
乞食聊養素	食を乞うて聊か素を養う	托鉢しつつ　修行する
自見已如此	自ら見ること已に此の如し	自分でこうと　知るからは
如何不省悟	如何ぞ省悟せざらん	何でその身を　考えぬ
我見出家児	我出家の児を見るに	いま坊さんを　よく見れば
昼夜浪喚呼	昼夜浪りに喚呼す	むやみにでかく　経をよむ
祇為口腹故	祇（タダ）口腹の為の故に	身の欲だけに　身を入れて
一生外邊鶩	一生外邊の鶩（ハ）す	仏道修行を　よそに過ぐ
白衣無道心	白衣の道心無きは	在家の人の　不信心
尚是為可恕	尚是れ恕すべきと為す	これはまあまあしかたない
出家無道心	出家の道心無きは	出家した身の　不信心
如之何其汚	これその汚を如何せん	何で許して　おかれよか
髪斷三界愛	髪は三界の愛を断ち	愛欲絶って　髪おろし
衣破有相句	衣は有相の句を破る	俗界すてた　黒染だ
棄恩入無為	恩を棄てて無為に入るは	恩愛すてた　この出家
是非等閑作	是れ等閑の作にあらず	なまやおろかな　ことでない
我見彼朝野	我彼の朝野を見るに	静かに人の世　見わたせば
士女各有作	士女各作あり	人はそれぞれ　仕事あり
不織何以衣	織らずんば何を以てか衣	機を織らねば　着もせぬし
不耕何以哺	耕さずんば何を以てか哺はん	鍬を取らねば　食いもせぬ
今稱佛弟子	今仏弟子と称するも	いま坊さんと　言いながら
無行亦無悟	行もなくまた悟りもなし	修行もせずに　悟りなし
徒費檀越施	徒らに檀越の施を費す	ただお布施だけ　いただいて
三業不相顧	三業相顧みず	修行なんどは　みもしない

聚首打大語	首を聚めて大語を打き	坊主が寄れば　ほらをふき
因循度旦暮	因循旦暮を度る	のんべんだらりと　日を暮らす
外面逞殊勝	外面は殊勝を逞しうして	見れば如何にも　殊勝顔
迷他田野嫗	他の田野嫗を迷はす	いなかばばあを　だまかして
謂言好箇手	謂ふ言（ワレ）好箇手と	おれはやりてと　いばっている
吁嗟何日寤	吁嗟何れの日にか寤（サ）めん	ああ、このばかは　いつさめる
縦入乳虎隊	縦ひ乳虎の隊に入るも	乳のみ子かかえた　虎よりも
勿践路名利	名利の路を践（フ）むことなかれ	名利の路は　なお危険
名利纔入心	名利纔（ワズ）かに心に入らば	名利にちょいと　気が向くと
海水亦難澍	海水の亦澍（ソソ）ぎ難し	海ほどかけても　すすげない
阿爺自度爾	阿爺自ら爾（ナンジ）を度せしは	父が出家を　許したは
不為衣食故	衣食の為の故ならず	着るや食うやの　ためでない
阿母撫璽頭	阿母璽が頭を撫で	母はわたしの　頭なで
親族遠送路	親族遠く路に送る	親類たちは　見送った
音容従茲隔	音容茲（コレ）より隔たり	お顔も声も　隔たれど
暁夜何所作	暁夜何の作（ナ）す所ぞ	明け暮れわが身　案じつつ
焼香請佛神	香を焼いて佛神に請ひ	神や仏に　香をたき
永願道心固	永く道心の固きを願へり	かたい修行を　祈るだろ
似璽今日作	璽が今日の作（シワザ）に似ば	今のたわけた　ふるまいは
豈得不牴牾	豈 牴牾（テイゴ）せざるを得んや	出家の旨と　ちがうだろ
三界如火宅	三界は火宅の如し	愛欲の世は　はかなくて
人命似朝露	人命は朝露に似たり	人の命も　露と消ゆ
好時常易失	好時常に失ひ易く	教を聞くも　稀にして
正法亦難遇	正法も亦遇ひ難し	仏に遇うは　むつかしい
宜著精彩好	宜しく精彩の好きを著くべし	どうか仏道　修行して
母待換手呼	手を換えて呼ぶを待つことなかれ	はたの心配　なくされよ
今我苦口説	今　我　苦口に説く	気も進まぬに　我は説く
竟非好心作	竟（ツイ）に好心の作にあらず	少しも好きで　言うのでない
自今熟思量	今より熟（ツラツラ）思量して	今よりよくよく考えて
可改汝其度	汝が其の度を改むべし	その行いを　改めよ
勉哉後世子	勉めよや　後世の子	勉めよ、若い出家たち
莫自遺懼怖	自ら懼怖（クフ）遺すことなかれ	のちに後悔　残すなよ　注15

この漢詩は、良寛の大きな墓石の前面に「山たづの」の旋頭歌とともに刻まれている。鈴木文台が選したという。激しさが浮き出て、当時の寺院に安住堕落する僧侶を厳しく批判してい

るという注釈が多く伝わっている。私は、当時の僧侶への批判もあるが、この漢詩の中核は、名利を捨てた孤独な仏道修行の実践の大事さをいうことにあると考える。それは、良寛が寺院の住職になることを捨てた独居修行の発心を読み取ることができるからである。「勉めよや後世の子」は良寛自身のことではないかと思う。

私はこの漢詩にある「宜著精彩好」の「精彩」は何か気にかかっている。渡辺氏の口語訳でははっきりしない。星野清蔵氏は、「須らく心の精気をとりもどし、好しと意を決し、法を求めて精進すべきである」とある。道元禅師の本証妙修の原理は、ただ打坐の一方究尽、文字言語を拒否する世界である。その世界が以心伝心するのである。良寛の以心伝心によって創りだされた「精彩」「心の精気」とは何であるのか考えさせられる。

入矢義高氏は、良寛の漢詩「僧伽」について次のように述べている。

あの寒山に多い教訓詩とは根底的に異なる点である。教訓詩を作るときの寒山には、自らへの羞恥の心は微塵もない。しかし良寛にあっては、世相の頽廃を憤り、僧の堕落を叱る詩でも、その底には常に嘆息の語気とともに、それを事々しく言わざるを得ないことへの苦渋の気分が漂っている。たとえば彼が悟り、有をも空をも破し、さらには中道をさえも捨遣すべきことを説くとき、その口ぶりは決していわゆる達道者的な、自らを高みに据えての垂戒の口調ではない。そこには、法を求め道を学ぶことそのことへの羞恥が根底にあり、その根底から出発してこそ、そのような高次の境涯に到りうるのだという想念が、彼の発言の核となっていると私は見る。ここにも、初心を失うことのない修行者としての良寛の姿がある。……この羞恥の心は、いわゆる謙虚さとは違う。それは自己への不断の省察から養われる心ではあるが、その省察の厳しさとともに、また少女のはにかみにも似た純朴な心情によって培われる心でもある。……と。注16

良寛は羞恥の心深き人であったというこの見方は、童心良寛といわれる内面世界を深める重要な視点と考えることができる。

古来高僧の伝記には、必ず悟りの体験が記されている。曹洞宗の開祖道元は二十六歳のとき、日蓮は三十二歳のときとされている。良寛の悟りは、道元、日蓮が悟り一宗一派を創始する宗教体験とはかなり違うと想定している。

その手掛かりとなる注目すべき良寛遺墨『佛説教云』を東郷豊治氏が1970（昭和45）年に紹介している。この遺墨の原典は、釈尊が弟子たちに最期の垂示した『遺教経』と考えられる。東郷氏は『佛説遺教経』と『佛説教云』とを対比した。良寛は長文でない『佛説遺教経』の六項目≪一摂心　二節食　三知慚耻　四堪忍　五常独処　六守口≫を簡素に要約し、しかもその順序を変えて『佛説教云』として次のように楷書している。

一 守口　口を守る　　「汝等もし種々戯論せば、その心すなわち乱る」

＜心の乱れを生ずる戯れのことばを口にしてはならない＞

二 摂心　心をおさむ　「汝等まさによく心を制すべし」

＜心の畏るべきは毒蛇悪獣よりも甚しきゆえ、決して心を放逸させてはならない＞

三 知慚耻　はじを知る「慚耻の服はもろもろの荘厳に於て最も第一なりとす」

＜無愧の者は禽獣に異ならない＞

四 堪忍　堪え忍ぶ　「忍の徳たる持戒苦行も及ぶ能わざる所なり」

＜よく忍を行ずる者のみが、有力の大人となれる＞

五 常独処　常に独処　「汝等もし寂静無為の安楽を求めば、まさに憒閙（ハイニョウ）を離れて、独処閑居（ゲンゴ）すべし」

＜雑踏の巷を離れ、静処の人は帝釈諸天の共に敬重するところである＞

六 節食　食を節する　「汝等もろもろの飲食（オンジキ）を受くること、まさに薬を服するが如くすべし」

＜うまいまずいのといって増減してはならず、この身を支えることができ、飢渇を免れうれば感謝しなければならない＞　注17

そして最後に「此は是れ佛の遺法にして、行人の守るべきところなり。謹みて軽忽にすることなかれ。人命は朝露のごとし。佛法は逢いがたし。努力哉（つとめよや）」とある。「努力哉」には「つとめよや」と良寛自身を励ますように仮名をつけている。

良寛は、釈迦の教訓、①自分を語らず寡黙、説教がましいこともせず　②偉らぶらず名利を求めず　③伽藍に住まず　身を飾る衣を用いず　檀家より搾取するようなことなく　④庶民以下の生活　自分に厳しく　人には寛大　⑤妻をめとらず　弟子を持たず　⑥生涯乞食し余れば人に施す　注18　を実践すること、それを悟りと把握したのではないだろうか。良寛の生涯を支えた信念、生涯を貫いた行動は、『佛説教云』の六項目の実践に淵源している。帰郷後の良寛の『戒語』、『請受食文』草庵山居、乞食托鉢等を想起すると、この六項目と相呼応していることが理解できるように思う。

良寛がこの仏法の実践を悟ったのは、円通寺時代だろうか、多年の諸国行脚のときだろうか、再び善光寺に参詣後の帰郷してからのことだろうか、確証はない。私は国仙和尚の偈には、時を経て必ず良寛の本道を悟る予見が込められていると思っている。

良寛は本道の修行を胸に、父以南の死を措いて、伊勢路から木曽路、十月の初め秋たけなわの木曽渓谷を善光寺へと歩いている。

(3)　再び善光寺に参詣する良寛

漢詩「再游善光寺」は、冒頭の東郷豊治氏の注釈が一般的な理解とされている。この再度の参詣について次の記述がある。

「二十年前と変ることなく妍らんたるは、ひとり風光だけである。思えば二十年前、先師国仙和尚に随行してこの地に遊んだ際には、二十年後、再びこの地に遊ぶことなど夢想だもせず、

善光寺にお参りをしてひたすら初心の成就を祈願し、盛んな衝天の志気に燃える良寛であった。こと多く志と違い、今一衣一鉢、見るかげもない乞食坊主としてこの地に再び立ち、往時に変ることもない妍らんたる風光に接した良寛、その感慨はどんなものであったであろう。」注19

私は漢詩「再游善光寺」は、最も言葉を慎み寡黙な良寛が悟りの境地を探索できる僅少の詩歌と考えている。しかし、東郷氏は「この詩があるところから、帰郷に際しては信濃路を辿ったものと推測されるけれど、この信州道中は帰郷の折の作であろうか。どうも詞華が生硬で、いまだかれの本領が窺えず、わたしはかれの作詩としては極めて初期の作品であろうと判じている。」と評している。注20

この漢詩は「詞華が生硬で、いまだかれの本領が窺えず」という漢詩の技法の是非は即断できないが、私は漢詩の表現の背後に注目している。確かに良寛の信念・意志が剥き出しに言語に表れていないが、二度目の善光寺参詣の内実は、良寛後半の生涯を決した画期的な悟りを開いていたと推測できるからである。それは、前述にある生い立ち・禅堂修行・諸国行脚と帰郷後の草庵生活等の事実をたどると良寛の仏道修行の違いが見えてくる。史実の少ない良寛の生涯をすべて明確にすることは困難なことであるが、本道を目指す山居修行の思想を知ることを通して漢詩の核心を明らかにできるだろう。良寛の漢詩は思想詩という鑑賞視座を確立して読み直すべきであると考える。

「こと多く志と違い、今一衣一鉢、見るかげもない乞食坊主としてこの地に再び立ち、往時に変ることもない妍らんたる風光に接した良寛、その感慨はどんなものであったであろう。」再び善光寺の境内に立つ良寛は外見、内見ともに、二十年前の禅僧の栄達をめざす良寛とは全く違っていた。故郷に帰り寺院をもたず閑かな地でひとり生涯修行を貫く良寛固有の純粋生命の映し出す静かな決意を心に秘めている。

「風光　猶　似たり旧時の妍」　善光寺の金堂や僧侶については全く触れていない。善光寺境内を大きく包む川の流れ、背後の緑峯の風景。善光寺の共生的存在世界のなかに良寛は立っている。飯田利行氏の「再游善光寺」前述を重ねてみる、「そんな風光の　何もかもが／その神（ココロ）を思い起させて／わしの心を包むのである」。風景に溶け込んでいる自然治癒力的な磨かれた美しさ、超人間的生命の善光寺本尊の精神が、帰郷し新たな修行を決心した良寛の心を大きく温かく包み励ましを与えている。善光寺の宇宙的世界と深く正対する良寛、あるいは西国から持ち続けた緊張が、ほっとして解きほぐされたのだろうか。

「旧時の妍」は、羞恥の心深き良寛でなければ感得できない、以心伝心の世界である。二十年前に深く感じた妍であり、昔からある善光寺の妍である。

今、僧に非らず俗に非らずという生涯修行の道を歩もうとする良寛の悟りの心境と善光寺の美しさが相互に感応している。苦悩から見出した帰郷後のひとり山居を決心する良寛は、善光寺風景全体から放たれる大きく温かく包む無私清明な日本人の心の源泉に触れて、共生感情が生じていると考えることができる。そこに、羞恥の心深き良寛の精彩、心の精気が、漢詩「再

游善光寺」を発現していた。良寛にとっては、「行」の途上の呟きである。

1688（貞亨５）年８月、松尾芭蕉が姨捨の月を見る旅で善光寺に参詣して、次の句を『更科紀行』に残している。

月影や　四門四宗も只一つ

芭蕉は、月の光に照らし出された善光寺の全景、宗門宗派を持ち大勢の善男善女のいる善光寺を照らし出している。月は阿弥陀如来を表わし、釈尊を表わしていると詠んでいる。

善光寺の宇宙的世界に、芭蕉は「月影」を詠み、100余年後の良寛は「旧時の妍」と詠んでいる。良寛の心奥を大きく温かく包み励ます「昔のままの磨かれた美しさ」と映ったものは何であったのだろうか。

良寛は善光寺参詣後、故郷ではなく戸隠・鬼無里を経て糸魚川に向かっていた。

安永庚午の秋（光照寺を旅立ち）、余まさに郷に還らんとし、厭川（イトイガワ）に至りて不預（病気）、某甲なる神主の舎に寓居し、夜雨の凄然たるを聞きて作あり。

一衣一鉢裁随身	一衣一鉢　裁かに身に随ふ	衣と鉢を　身につけて
強扶病身坐焼香	強ひて病身を扶けて　坐して焼香す。	病む身起して　香をたく。
一夜蕭々幽窗雨	一夜蕭々たり　幽窗の雨	寂しい夜に　雨聞けば
惹得十年逆旅情	惹き得たり十年逆旅（ゲキリョ）の情。	長の旅路がしのばれる　注21

良寛は病床にあって、国仙和尚と別れて十年の諸国行脚を回想している。病が治癒して故郷出雲崎めざして出立する。善光寺からなぜ糸魚川に行ったかは不明である。

Ⅱ　善光寺の魅力について考える

良寛が漢詩の題材として善光寺をなぜ択んだのか。良寛の漢詩（約400編）和歌（約1200首）を通読しても寺院、神社は僅少であることからも、通りすがりで詠むにしても良寛の内面に響くものがあると考えられる。足を留めて善光寺的宇宙を体感している良寛の姿が想像できる。足を留めた要因に師国仙和尚と訪れた善光寺の魅力があった。

1　庶民信仰、宗派を超えている善光寺

熱心な浄土真宗信者の小林一茶は、折々善光寺を訪れ俳句を残している。

春風や　牛にひかれて　善光寺

開帳に　逢うや　雀も　おやこ連れ

善光寺参詣の人たちは、哀調を帯びた御詠歌をとなえながら、数百里の道を来た。

身はここに心は信濃の善光寺　導き給へ弥陀の浄土

遠くとも一度は詣れ善光寺　救ひ給ふは弥陀の誓願

今の信州善光寺はご開帳時だけでも、平成３年約400万人、平成９年515万人、平成15年620万人参詣者がある。『善光寺縁起』や説話によって、一生に一度は善光寺にお参りしての極楽往生の信仰は、広く人々に信じられている。また、死者の骨や位牌を善光寺に収めることも行われている。

善光寺信仰の特色の一つは、善光寺参詣によって現世の福徳よりも、「これで極楽往生ができる」という心のやすらぎを体験することにある。

一つは、善光寺は一宗一派に偏していない。寺内は院坊天台宗、浄土宗などに属しているが、善光寺そのものは何宗にも属さない。

一つは、女性の参詣者が多いことがあげられる。『とはずがたり』には、当時女性だけの旅行者が稀だった鎌倉時代にも女性だけの集団参詣したことが記されている。また、江戸時代には、女性の参詣者が全参詣者の半数を占めている。さらに小林計一郎氏は、

「善光寺はその由緒、格式においては（高野山、日光山等の有名寺院に比べて）かなり見劣りがします。国家の権力とも関係はなく、名僧知識とも特に深い因縁はありません。特定の宗派や教団との関係も薄く、有力な氏族によって特に崇拝されたということもありません。このように格別の由緒、格式もなく特に有力な檀越（支持者）もない地方の一寺院が広く人々の信仰を集めているのは、誠に不思議です。」と述べている。注22

善光寺の信仰の広がりは、鎌倉時代の源頼朝の金堂再建にみる政治権力の庇護、江戸時代の出開帳、回向開帳に見る善光寺宗団の積極的な布教、募金があり、さらに、善光寺説話の石堂丸物語、牛にひかれて善光寺参り等、『平家物語』『曽我物語』などの文学、そして、全国の女性に広がった手毬唄、数え唄がその役割を担っていた。

2　善光寺縁起と善光寺聖

善光寺の信仰が、平安時代から現代まで、広く深く全国に行きわたっているのは前述のように幾多の要件が重なっている。仏教が貴族、武士中心の信仰にあって、一般庶民が受け入れるようになった要件に、阿弥陀信仰と浄土思想の普及、平安時代中期以後さかんになる霊験所めぐりの風習、諸国を遊行する聖の活躍があげられる。そこで、善光寺縁起と善光寺聖を考えてみたい。

(1)　初期の『善光寺縁起』

『善光寺縁起』の初期の縁起は、『扶桑略記』注①（平安時代末期）、『伊呂波字類抄』（鎌倉時代初期）に紹介されている。その中心となる話は、

１話　善光寺如来は阿弥陀三尊で、欽明天皇13年に百済から送られてきた。日本最初の仏なので本師如来といった。

２話　この仏は天竺の月蓋長者が鋳奉った阿弥陀三尊黄金仏である。

３話　帝がこの仏を崇拝すると、たまたま悪病が流行し、大連物部尾興（オオムラジモノノ

ベノオコシ）が仏を難波の江に沈める。

4話　信濃の人がその仏を背負って帰り、やがて水内郡に安置する。

などである。これらの話の中で注意したいのは、1話について、「『日本書紀』注②の仏教伝来の項の引用は、仏像が釈迦如来でなく阿弥陀三尊であることが異なり、…本朝最古の仏（本師仏）が阿弥陀如来であるという説ができ、次の段階でそれが善光寺仏であるということになったのであろう。」という縁起の説話構成上の論考がある。注23

注①『扶桑記』―推古天皇10年（602）、秦巨勢大夫に命じて信濃へ送りました。…欽明天皇13年10月13日、百済の国から、阿弥陀三尊が波に浮んできて、日本の摂津国難波津（大阪府）に着いた。そののち37年を経て、日本人ははじめて仏法というものを知った。つまり、この三体の仏が最初の仏像である。そこで世間の人はこの仏を本師如来といっている。推古天皇10年4月8日、仏の託宣によって、天皇の命令が下され、信濃国水内郡に移し奉った。釈尊の在世中、天竺毘沙離国の月蓋長者が釈尊の教えにしたがい、正しく四方に向かい、はるかに礼拝し、一心に阿弥陀如来・観音・勢至にお祈りをした。ときに三尊は身を一着榛（ちゃく）手半に縮めて月蓋の門にあらわれた。長者はまのあたりに一仏二菩薩を見て、たちまち金銅をもって仏・菩薩を鋳造し奉った。善光寺如来である。月蓋長者が死んだ後、仏は百済国へ飛び移り、千余年ののち、海に浮んで本朝に来た。いまの善光寺の三尊がその仏像である。注24

注②『日本書紀』―552年　欽明天皇13年百済の聖明王が釈迦の金銅仏などを献上した。天皇は外国から来た仏を拝んでもいいかどうか群臣に相談された。大臣蘇我稲目は拝むことに賛成、大連物部尾興は反対した。天皇は仏を稲目に与え稲目はその家を寺にして仏を拝んだ。すると悪い病気が流行ったので尾興らは仏を難波の堀江に捨て寺を焼き払った。…　注25

善光寺創建のなぞはさらに、『日本書紀』欽明天皇13年の仏教初伝の項をなぜ引用したのか。善光寺如来は、渡来仏の阿弥陀如来であるのか。また、秘仏阿弥陀三尊を象った前立本尊の彫刻は平安様式ではないのか。など創建の史実の研究にも影響を与えている。

2話について、この仏は『扶桑略記』では秦巨勢大夫が送り、『伊呂波字類抄』では信濃の人若麻績東人が下向の日に伝えたとある。早い時期の縁起には開山本田善光、妻弥生、息子善佐が登場していない。当然、善佐、皇極天皇の姿はない。鎌倉時代末期の『善光寺如来之事』（金沢称名寺蔵）に本太（田）善光が登場する。

秦巨勢大夫、若麻績東人は地位があるが、後の縁起の開山本田善光は庶民の人である。妻弥生の姿からは渡来風の感じがする。善光寺創建のなぞは深いと思われる。

平安時代末期にできた『今昔物語』（1000余話）に信濃の話が10話あるが、善光寺についてまったく触れていない。また『宇治拾遺物語』の編集者は、信濃を無仏世界と考えている（「信濃国の聖の事」）。都の人々に善光寺が有名になって信濃が仏の国と言われようになるのは

鎌倉時代に入るころと思われる。

善光寺縁起の説話は、『平家物語』（善光寺炎上）、『聖徳太子伝記私記』（善光寺如来と太子との書簡）、『室町時代物語大成』（善光寺如来本懐上中下）、江戸時代の『善光寺如来略縁記』（作者五車著。同系の縁起、寛文８年1668刊行）、『善光寺和讃』（明治42年1909善光寺保存会発行）などの時代を経て出来ている。

現在に語り継がれている『善光寺縁起』の概要を小見出しによって読む。

・月蓋長者　・閻浮檀金（エンフダゴン）　・聖明王　・日本伝来

・難波の堀　・皇極天皇の本堂造営　注26

善光寺縁起は究めて多種類に及んでいるが、前述のように平安時代末期までに出来上がり、その後の加わった内容については、それぞれの時代的影響が考えられる。

聖徳太子は古代国家づくりに仏教を積極的に導入した。その高度な理念と普遍性によって、人間の精神的な基盤として人々の心を支え、さらに国家、社会を支える重要な意義がある。善光寺は、時代の現実問題である政治的、経済的、宗派的な基盤の安定を図りつつ、庶民の善光寺信仰を維持し伝えてきている。善光寺縁起説話の時代による多様性は、善光寺信仰を広める多くの宗教者たちの宗教体験と智慧が込められているように思う。

(2)　善光寺聖

良寛が関心を持った浄土教、庶民信仰を広めた善光寺聖（勧進の聖）の活動に触れる。奈良時代の行基のように、正規の寺院を離れて、諸国を遊歴して歩く僧がいた。平安時代中期、「聖」（ヒジリ）、「上人」（ショウニン）と呼ばれ、浄土教の布教に大きな役割を果した。

奈良時代以来、国家の保護、広大な領地の上に安眠する大寺院の僧は、僧としての修行にはげまぬ者が多くなり、天台、真言の寺院でも、上級職は貴族の子弟が独占し、寺院も俗世と同じく栄達、出世の機関になった。この堕落に比べて、寺院に属さぬ聖は、純粋な信仰に生き、熱烈な信仰が自ら帰依者を集めた。

重源・親鸞・一遍・妙観（妙観は善光寺南大門、談義所月形坊に学び、浄土宗名越派を故郷陸奥にひろめた）は善光寺信仰と深く関わっており善光寺聖的な性格をもっていた。善光寺聖は善光寺に直属する聖もあったが、多くは鎌倉新仏教の諸派に属して活躍していた。鎌倉時代にできた浄土系の新仏教は、すでに盛んになっていた善光寺信仰を利用した。

善光寺は、半僧半俗の遊行僧の聖が集まる霊場の一つである。善光寺如来は中尊が一尺五寸（約45㎝）を笈厨子に納め背負って、善光寺縁起を持ち回国した。また絵解き法師も現れた。中世から明治にかけて、多数の善光寺聖、回国六十六部が活躍していた。縁起の説話の「本田善光が如来を背負って信濃へ下った」は善光寺聖の習慣から生まれたのだろうか。

平安時代、空也（903－972）は諸国を遊歴して念仏をすすめて「市聖」（イチノヒジリ）、「阿弥陀聖」と呼ばれた。空也が百日参篭し仏告によるとする鎌倉時代後期建立の芝原善光寺

本堂（大分県宇佐市、浄土宗）。御影堂新善光寺（もと京都五条通寺町、時宗御影堂派の本山）は弘安7年（1284）建立。御影は善光寺如来また画像のことである。時宗の真善光寺が各地に建立された。群馬県桐生市青蓮寺、福井県敦賀市新善光寺、島根県松江市善光寺など、各地の新善光寺は善光寺聖の活動の基地であった。現在、新善光寺と呼ばれる寺が、西日本を含めて二百余が伝えられている。

良忍（1073－1132）は自己の唱える念仏の功徳は他人にも融通する融通念仏を創めた。鎌倉時代には善光寺信仰と融通念仏とが結びついたと考えられる。東大寺を再建し、高野聖の重源（1121－1206）は前半生を聖の諸国遍歴をし、善光寺に参詣した。一度は13日間に百万偏の念仏を満たし、仏が夢想に金色の舎利を賜りこれを呑み込んだ。二度は、七日七夜、不断念仏を勤修し、阿弥陀如来を拝見した。（自叙伝『南無阿弥陀仏作善集』）重源の体験は善光寺の霊場としての霊験をさらに高めた。また、高野聖と善光寺聖の関係が深まり、高野山に発した『熊谷蓮生坊物語』（熊谷直実）、『刈萱物語』（刈萱上人・石堂丸）の説話が、高野聖と善光寺聖との交流によって、善光寺に関係付けられた説話になった。

親鸞は建暦元年（1211）に赦免された後、善光寺（善光寺堂照坊は親鸞百日逗留の遺跡）にしばらくいた。親鸞は若くして聖徳太子信仰を持つ。浄土真宗は聖徳太子信仰と強く結び、聖徳太子堂を持つ寺院が多い。鎌倉時代には善光寺内に聖徳太子堂があった。善光寺伝説にある善光寺如来と聖徳太子の書簡は『古今目録抄』など鎌倉時代の本に記されている。

一遍は文久8年（1271）善光寺参詣し、善光寺信仰によって悟りを開いた。（「二河白道」の絵を得て、郷里伊予温泉郡窪寺の本尊にする）弘安2年（1279）佐久郡伴野（佐久市野沢）で歳末の別時念仏を行い、弘安3年春、再び善光寺に参詣する。一遍は深く善光寺如来を信仰し、「善光寺如来はわたしのもとにおられる」と称した。一遍の後継者真教（他阿）は小山新善光寺（栃木県小山市）を根拠地にして善光寺信仰と時宗の信仰をひろめた。

善光寺には大勧進、大本願の二大支院がある。その起りは、大勧進は回国勧進聖の元締的職掌ではないか、大本願は各地に散在する聖的な宗教者の元締ではないかと思われる。中世の善光寺参詣はある期間参篭して念仏を修めることが一般的で、参詣者は聖などの宗教者が中心であった。善光寺聖などの働きは貴族、武士階級から農民、庶民の信仰へをより確かにしていったと考えられる。注27

聖の活躍の広がりを考えると、諸国行脚の途中で良寛が善光寺聖と出会う機会があったのではないかと思い浮かべている。

3　善光寺創建のころを探る

善光寺参詣のころ、良寛は善光寺の縁起・聖と庶民信仰を裏付ける創建の歴史に関心があったのではないかと想像している。後年、漢詩において『寒山詩』、和歌において『万葉集』、書において『秋萩帖』にみるように、当世の江戸後期を遠く源流に遡り、そのことの原初を志向する良

寛である。師大森子陽に仁の心を学び、師国仙和尚から本道の生涯修行を授かっている良寛にとって、善光寺に足をとどめて漢詩を詠むには、風光の美しさに善光寺創建のイメージが重なっているのではないか。渡来仏といわれる秘仏善光寺如来、その善光寺創建を支えた渡来の人々を考えてみる。

・旧石器文化。日本列島と大陸とが地続きのころは、大動物、人類も行き来できたか。

約3万年前、野尻湖立ヶ鼻遺跡（信濃町)。長野県最古。最終氷期の温暖の時期、ナウマンゾウなどを狩る人々が住んでいた。槍先形尖頭器・ナイフ形石器などを使用。

・縄文文化。日本人の精神の根底を培った森林、海、狩猟生活の1万年。

BC12000年鷹山遺跡（長門町）本州最大の黒曜石産地。　広範囲の交易。

BC4500年、与助尾根遺跡（茅野市）縄文の大集落のムラができる。

・弥生文化。渡来の稲栽培、鉄器など富の蓄積による争いが生まれる。

BC2000年、伊勢宮遺跡（長野市）渡来系弥生人骨が出る。渡来系の集団が存在していた。

1世紀、松原遺跡（長野市）大環濠集落250棟の竪穴住居跡、栗林式土器。倭の一国か。

川田条里遺跡（長野市）規模の大きな水田跡。

3世紀、箱清水遺跡（長野市）箱清水式土器の鮮やかな赤い土器。箱清水王国実在か。

祭に用いられた赤い土器は千曲川沿いの中野・更埴・松本等に広がり、文化圏・クニをつくり、水内・高井は北陸方面との交易の拠点になった。注28

邪馬台国の時代には、北陸系土器と東海系土器が東日本へ流入した。千曲川、天竜川が新しい文化を運ぶ道筋であった。注意すべきことは、日本海岸から千曲川が、外来文化、渡来人の通常の通路であったことである。渡来人は越国を経てベンガラの赤い土器のクニの基をつくったと思われる。

近年、渦巻き状の装飾がついた鉄剣がでた根塚遺跡（木島平村)。3世紀後半、この渦巻き状装飾は、朝鮮半島東南部の伽耶（カヤ）地域で盛行したもので日本海を介して朝鮮半島との直接的交流も指摘されている。このことは、善光寺創建に関わる人たち、善光寺如来の由来を考える上で重要である。注29

・古墳文化。大陸、半島との交流が頻繁になり古代国家つくりがはじまる。

4世紀、森将軍塚古墳（千曲市）前方後円墳、 日本最大の竪穴式石室。赤い土器の国が科野国になりその王の墓と見られる。

5世紀、大室古墳群（長野市)、高句麗式積石塚古墳5百。馬を飼い使う渡来の集団か。

4世紀末5世紀初・5世紀末6世紀初、日本列島に大勢の渡来人が入ってきている。

古代信濃の「水内南更科には6世紀前半の松山窯が築かれている…この頃の窯業工人の多くは渡来人だからここにも彼らの畿内から信濃への再移住が推察されている。642（皇極元）

年に建てられたとする草庵（善光寺）は、北信濃に遷されていた渡来人対策のひとつであったことだろう。彼らからの要望によって仏像は東遷したかもしれない。なお草堂が瓦葺きの寺院に発展したのは7世紀後半のこと…鎧瓦は川原寺式である。これについて壬申の乱（672）における…地方豪族の活動に対する論功行賞としての寺院建立を可能にした…この説は善光寺にも援用できる。」と桐原　健氏は述べている。注30　渡来人は畿内からの再移住より以前に伊勢宮遺跡が示すように北信濃には足跡があり、旧渡来人たちの持仏であったかもしれない。また、科野国の科野氏（後裔の金刺氏）に関わる「斯那奴阿比多」（シナノアヒタ百済読み科野直か、科野国造姓出身の日系百済人か）を百済が来朝させ好を結ばせたと『日本書紀』継体天皇10年に記されている。「斯那奴阿比多は古く百済より渡来し信濃に定住した者の二世と解し、信濃への渡来人定着は6世紀初頭、或はそれ以前に遡ぼり得る」と考えられる。注31

科野氏と百済のかかわり、科野氏と大和王権のかかわりは、善光寺創建と深く関わっていると考えられるのではないか。善光寺本尊の一光三尊像は科野氏族の持仏ではなかったか、諏訪神社創建以来、科野氏（後裔が金刺氏）が深く関わっている。仏教伝来以前の神と科野国への仏教伝来による仏とが結ばれた神仏合祭の信仰の推測も可能になってくるだろう。今後の考古・文献・仏像等を総合した困難な長野県古代史研究の進展が待たれる。

公式的には百済仏教が畿内に入り、飛鳥仏教をつくり、そのあと新羅、高句麗の仏教が複合的に入ってきたといわれる。しかし、新羅高句麗の仏教が日本海を経て新潟に入り信濃川をさかのぼり、長野の善光寺あたりに出て、さらに北関東に入る可能性が生まれている。

創建の頃、畿内に入った貴族の仏教とは違った庶民の仏教は日本海の沿岸からの道もあるという論考がある。注32　科野国への仏教伝来は公伝（538年）よりも古いと思われる。

・飛鳥文化。白鳳文化。仏教をひろめて古代国家統一が進む。

7世紀、元善町遺跡（長野市）創建のころの善光寺か。善光寺瓦の研究は白鳳の古瓦の年代推定を巡って興味深い論議が続いている。考古学者藤森栄一氏は、

「元善町の白鳳瓦がわりと小さいことと、発見地が散っていることから、おそらくこの門前町の密集した人家の地下には、いろいろの大きさの鎧瓦や宇（ノキ）瓦が埋もれていることは疑いない。おそらく白鳳期の四天王寺式か川原寺式の伽藍があっただろうことは、その縦長な現地形や地割からも推測できる……善光寺瓦にいちばんよく似ているのは弘福寺瓦、大和飛鳥にある川原寺である」と、信濃国分寺、東大寺落成（745）より古い白鳳時代としている。

この論に対して田中重久氏は善光寺創立を平安時代以降としている。注33

創建のころは、草堂、民家であり善光寺の呼称でなかったという説もあるが、美しい丸瓦と平瓦の組み合わせの善光寺瓦が白鳳期のものとすると、若槻稲田二ッ宮、明科廃寺（明科町）跡、雨宮廃寺跡、県道荒瀬原バイパスD点など出土の瓦などからそれぞれの地に白鳳期の寺が存在したことが考えられる。

良寛は、日本の原始古代探究に関心をもっていた。私は、良寛の詩歌における万葉仮名の用い方から、その言語風土として白鳳精神を想定している。古代国家を生み出し、白鳳文化の創造を支えた族長たちの「ますらお」の矜持は無私清明な心であっただろう。

ますらをの踏みけむ世々の古道は
荒れにけるかも行く人なしに
いそのかみふるの古道さながらに
み草ふみわけ行く人なしに　　良寛

Ⅲ　善光寺と良寛の感応の世界

1　良寛の関心を誘う淵源

日本の原始古代の研究が進展して、仏教伝来のルートが今までの公伝、百済（新羅・高句麗）―瀬戸内海―難波津―飛鳥と、日本海ルート百済・新羅・高句麗―日本海沿岸（出雲・越前、越中、越後など）が明らかになることを期待している。特に権力者の仏教に対して、渡来人を中心にした庶民・民衆レベルの仏教伝来が善光寺の光と影を解明できるだろう。さらに、庶民・民衆信仰を考えるとき、仏教伝来以前、人々の心を安らかに森林、海洋と共生する縄文時代の存在が注目されるだろう。

人間の生き方の基本的な自覚は、民族によって異なるものがある。ギリシャ人、インド人、ヘブライ人、中国人いずれも何らかの客観的な理法・規範の存在を認め、それに従い、それを実現することを人間の生き方の基本としている。これに対して日本人は、歴史のそのはじめから、ひたすら主観的な無私清明な心を追求し、それを十全な人間関係を実現する倫理として捉えてきたとする、相良　亨氏の論考がある。注34

「ひたすら主観的な無私清明な心」は、日本人が列島の森林に覆われた大地に足跡を印し、一万年余の縄文時代に培われた「大自然」（生命あるものを含む自然物、大自然の摂理）に対する共生感から生まれた宗教的情操であると思う。「大自然」が求める聖なる私のない心、ひたすらなる心情の純粋性を失うことは「反大自然」の心である。良寛は人間社会のなかに「反大自然」の心を強く感受したのではないだろうか。「反大自然」の心に対する限りない超克、「大自然」との共生が、純粋生命として良寛の心にあると考える

良寛が傾倒した道元禅、老荘、論語は、低地アジアに起源をもつ古典古代以前の思想ということができる。このアジア的の思想は古代から近世にいたるまで、日本の制度や文物に大きな影響

を印してきた。道元の根本思想は釈迦の脱化を伝えている。その坐禅による肉体修練は、人間でもない、動物でもない、植物でもない、無機物になって、自然が永らえて流れていくことができる宗派ではない仏教の本質そのものに良寛は感心している。注35

善光寺体験の漢詩は、良寛の内面に自然風景がどんふうに存在したかということではない。善光寺を包む大自然がひとつの世界としてあるとき、良寛はそれに対してどんな態度をとっているかである。良寛は善光寺の大自然宇宙的世界と共生の態度を示していると考えられる。この共生の態度は、山居草庵の代表作といわれる漢詩にある。

生涯懶立身	生涯　身を立つるに懶く	世間の事に　気が向かず
騰々任天真	騰々　天真に任す	身まま気ままに　世を過ごす。
嚢中三升米	嚢中に　三升の米	ふくろに三升の　米あり
炉辺一束薪	炉辺　一束の薪	いろりのたきぎで　くらしてる。
誰問迷悟跡	たれか問わん　迷悟の跡	迷いやさとりは　知るものか
何知名利塵	なんぞ知らん　名利の塵	名誉も金も　いらぬこと。
夜雨草菴裡	夜雨　草菴のうち	草の菴に　雨を聞き
雙脚等閑伸	雙脚　等閑に伸ぶ	両足どっかと　伸べて寝る。注36

「雙脚　等閑に伸ぶ」思いのまま身体の伸びをして、五体を大宇宙、自然の摂理のうちに浮かべ、ほっと息をつき、心地よい生きる共生感覚を喫している姿をみることができる。

良寛の長身長頭や容貌から出雲系日本人の説がある。古代出雲族の源流は朝鮮半島の新羅地方という。注37　善光寺は、百済系の大和の人たちと新羅・高句麗系の出雲・越の人たちの交叉点にあると考えると、良寛の関心はかなり強かったのではないかと思う。

2　良寛の純粋生命

1977（昭和52）年夏、信濃教育会臨地講習で良寛遺跡を訪ねたとき、美術学者宮　栄二氏は良寛の人格について「かの鈴木文台ほどの碩学でも〈ただし道徳はあずからず〉といって、人間性の深さを指摘している。どうしてそのような人格が形成されたのか、どんな科学的分析的研究もしょせん解き明かせないであろうが…われらにも自然により授けられた感受性があり、理屈では説明できなくても、良寛の作品を眼前にすることによって、その至純さに触れ、先心の喜びを感ずることができる。研究は人それぞれの解釈があってよい。ただ、自己の素直な心で良寛をみつめることである。…」諄々と話された。

また座談の席で、講師の歴史学者の一志茂樹氏は、

「良寛は日本人の典型である。」ぽつんと、しかし良寛はどのような人かの再質問は許さない気迫で応じられた。今もその「自己内対話をせよ」の緊張感を思い起している。

「良寛さまの極みは真の大愚の徹底、それが東洋の霊性的自覚であり、今もなお万人に敬慕さ

れる所以である。」と小池與一氏は西田哲学の純粋経験の世界を語られる。

吉本隆明氏は「良寛の性格悲劇には緊張と弛緩のふたつの位相があって、緊張の極限では、やがてくる近代の人間悲劇の必然的な形に接続し、弛緩の極限では師国仙が贈り名したように大愚という性格に接続していたとおもえる。…托鉢の途中で手毬をつき子どもと遊ぶ良寛も、詩文を作り墨書する良寛も、緊張と弛緩のあいだの均衡の姿であって、弛緩の表れとは到底おもわれない。わたしの推測では良寛の均衡した姿勢は、一見すると放縦なようで実は厳密だった僧侶としての規範からきているとおもえる。」と良寛の内面に深く切り込む論考がある。注38

良寛の僧侶としての規範とは、坐ることによって身心に「大自然」対しての統一感を修め、ひたすら主観的な無私清明な心を体現することであろう。それが良寛の身心に秘められた純粋生命である。良寛晩年の漢詩がある。

草庵雪夜作	草庵雪夜の作
回首七十有余年	首を回らせば　七十有余年
人間是非飽看破	人間（ジンカン）の是非　看破に飽きたり
往来跡幽深夜雪	往来の跡幽かなり深夜の雪
一炷線香古窗下	一炷の線香　古窗の下　注39

良寛は「人間の是非」を捨てきれずに、古い窓、壁にむかって一本の線香を立て、坐り続けている。生涯、独居して、「大自然」に対しての共生を体現する本道の修行を貫いた。修行のための坐禅というより、老子や荘子のように、天地自然とひとりでに一緒になって遊ぶような、あるいは、善光寺で経験した統一感、共生感を感じるような坐り方であったろう。

「大自然」（環境）と人間存在は現代の課題でもある。「浄土往生」の前提の「仏の国」が破壊・崩壊に瀕している。人間と自然の救済者となる主客非分離性の活動の論考がある。

――「コミュニティ的生命世界」は多様な人間を含めて地球上のさまざまな存在者が一つの共存在の場を自己組織しながら調和的に生活する世界である。共存在の場とは、この世界を生成してくるコミュニティ的生命の活きのことである。この活きる純粋生命が現代の「救済者」である。――注40　良寛が「反自然」の心を強く感受した無私清明の心を失った人間社会の根源的生きる態度に、光明が輝く可能性があるのだろうか。

良寛は善光寺参詣して「旧時の妍」、即ち、「大自然」、「限りない遍在的生命」、「純粋生命」を感受したに違いない。そして故郷へ帰って、宗派、俗世を越え、しかし人間を置いて、日々の「行」を通して大宇宙大自然の摂理に限りなく接近し、日本人の普遍な「大自然」に対する無私清明な共生の心、大宇宙の摂理の純粋生命を騰々と生きたと考えることができる。

参考文献　注

1　東郷豊治『良寛詩集』創元社1962. 4刊　P359

2・10・15・21・36・39　渡辺秀英『良寛詩集』木耳社1974.10刊P84～86.111.145.155.307

3　星野清蔵『良寛の詩境』弥生書房1966. 9刊　P473

4　飯田利行『良寛詩集譯』大法輪1969. 5刊　P295

5　加藤僖一『良寛事典』新潟日報事業社1993. 9刊　P81～331

6・7　谷川敏朗『良寛の生涯と逸話』野島出版1975.12刊　P15.35

8・11　大場南北『良寛ノート』中山書房1974. 1刊　P35.40

9　宮　榮二編『良寛研究論集』象山社1985. 5刊　P420.421

12　柳田聖山『沙門良寛』人文書院1989. 1刊　P137.138

13　相馬御風『良寛を語る』有峰書店1974. 6刊　P2

14　相馬御風『大愚良寛』春陽堂1918. 5刊　P95

16　入矢義高『日本の禅語録20』講談社1978. 5刊　P32.33

17・20　東郷豊治『良寛』東京創元社1971. 9刊　P83.110～112

18　田村良炳『良寛についてのなぞ』笠原印刷所1977. 5刊　P66.67

19　三輪健司『良寛へのアプローチ』野島出版1975. 4刊　P146.147

22・26　小林計一郎『善光寺さん』銀河書房1982. 1刊　P1～5.10～16

23・24・25・27・33　小林計一郎『善光寺史研究』信濃毎日新聞社2000. 5刊
P48.49.65～79.163.662.849

28　長野県埋蔵文化センター著『長野県遺跡探検』ボロンテ2001. 9刊P13～128

29　古川貞雄他『長野県の歴史』山川出版1997. 3刊　P25.26

30　森　浩一編『日本の古代2』列島の地域文化　中央公論社1995.11刊
桐原　健「山麓と河川ぞいに拡がる信濃文化」　P283

31　長野郷土史研究会機関紙『長野』第103号1982. 5刊
桐原　健「善光寺創建に係った氏族たち」　P26

32　森　浩一編『日本の古代13』心の中の宇宙　中央公論社1996.10刊
鎌田茂雄「東アジアの仏教伝播」　P443

34　相良　亨『日本人の心』東京大学出版会　1984.11刊　P74

35・38　吉本隆明『良寛』春秋社　1992. 2刊　P2.3.18.23

37　紀野一義『良寛さまを旅する』清流出版1999. 7刊　P74

40　清水　博『場の思想』東京大学出版会2003. 7刊　P14

- 身体を構成する様々な細胞のように、多様な個が一つの場を自己組織しながら共に存するという「コミュニティ的存在」という存在の形を考える…
- 「救済者」とは、人間に働いてその価値観を主客分離的なものから主客非分離的なものに変えて、人間の自己中心的活動をコミュニティ的活動に変態させる超人間的生命のことである。
- 地球を一個の生命体として宿る全体的な生命のことを、私は「限りなく遍在的な生命」（純粋生命）と呼んできた。

良寛年譜　　2003.9.30作成

区　分	西暦	年号	年令	摘　　要	日本の主なできごと
	1758	宝暦8	1	出雲崎に生れる。幼名栄蔵。 ＊注「　」の書籍は良寛に関係する記載がある。	田沼意次政治始まる。
	1760	10	3	妹むら子生れる。	
	1762	12	5	弟由之生れる。	小林一茶生れる。
―――	1769	明和6	12	妹たか子生れる。	
子陽塾	1770	7	13	師大森子陽のもとで儒学を学ぶ。弟観山（宥澄）生れる。	新潟の騒動起きる。
時　代	1771	8	14	弟香生れる。	
―――	1773	安永2	16	元服して文孝と名のり、名主見習役となる。	
光照寺	1775	4	18	名主職を継ぐ。突然光照寺玄乗和尚のもとで僧侶の修行を始める。	杉田玄白解体新書を著す。
時　代	1777	6	20	妹みか子生れる。	
―――	1779	8	22	国仙和尚（57歳）に随行し、善光寺に参詣して備中玉島円通寺におもむく。	ロシア船国後島へ来る。
円通寺	1783	天明3	26	母秀子死亡。（49歳）	
	1785	5	28	亡母追善（三回忌）のため一時帰郷か。	天明大飢饉。
時　代	1786	6	29	父以南（51歳）隠居し、由之（25歳）名主職につく。	浅間大噴火。
	1789	寛政元	32	由之の長男馬之助生れる。	与謝蕪村死す。
	1790	2	33	師国仙和尚から「附良寛庵主」の印可の偈を受ける。	松平定信老中となる。
―――	1791	3	34	師国仙和尚示寂。（69歳）子陽、山形鶴岡で死去。円通寺を出て諸方行脚。	
諸国行脚	1793	5	36	父以南入洛。	ロシア使節北海道へ来る。
	1795	7	38	父以南（60歳）が京都桂川で投身自殺。 良寛上洛し、亡父の法要に列す。	
時　代	1796	8	39	越後に帰国の説がある。	
	1798	10	41	弟香（28歳）死亡。　貞心尼生れる。	イギリス船室蘭へ来る。
―――	1799	11	42	帰国の途上善光寺に参詣する。糸魚川で旅の病床につく。	本居宣長古事記伝完成。
一所不在	1800	12	43	弟観山（31歳）死亡。	
	1801	亨和元	44	大村光枝（松代藩歌人）が五合庵を訪ねる。 由之代官所復帰問題で敗訴。	伊能忠敬北海道測量。
時　代					
	1802	2	45	寺泊の蜜蔵院、牧ヶ花の観照寺に仮住する。	
	1803	3	46	国上の本覚院、野積の西主寺に仮寓。	十辺舎一九東海道中栗毛を書く。
―――	1804	文化元	47	五合庵に定住。由之、島崎に隠棲する。 （出雲崎住民に提訴をされる）	
	1805	2	48	大忍「無礙集」出版。	
五合庵	1807	4	50	親友三輪左一の死を悼む詩を詠む。	アメリカ・ロシア船長崎へ来る。
	1808	5	51	法友有願和尚の死を悼む詩を詠む。出雲崎中山の西照庵に仮寓。	
	1810	7	53	亀田鵬斎（江戸の儒者、書家）が五合庵を訪ねる。	
	1811	8	54	由之隠居し、与板の庵室に入る。馬之助山本家を継ぐ。橘崑崙「北越奇談」を出版。	間宮林蔵ら樺太探検。
	1812	9	55	妹たか子死亡。（44歳）巌田州尾「萍藻録」成る。	
時　代	1814	11	57	玄乗破了死す。鈴木文台「喫烟詩話」成る。	越後に百姓一揆起こる。
	1815	12	58	小田島充武「越後野志」書かれる。	滝澤馬琴南総里見八犬伝を書く。
	1816	13	59	鈴木文台「草堂集序」成る。（良寛詩集は出版できなかった）	

区　分	西暦	年号	年令	摘　　要	日本の主なできごと
――――	1817	14	60	乙子神社草庵に移る。	
	1818	文政元	61	大関文仲「良寛禅師伝」を著す。	イギリス船浦賀へ来る。
乙子草庵	1819	2	62	解良叔問死亡。(55歳)	小林一茶おらが春を書く。
	1820	3	63	乙子草庵をはなれ、行脚に出たか。	
	1821	4	64	神竜「名家古今詩選」出版。	
	1822	5	65	小池貞世「良寛詩写本」成る。	二宮尊徳小田原藩にとりたてられる。
時　代	1823	6	66	丹波思亭「良寛伝」書かれる。	
	1824	7	67	妹むら子死亡。(65歳)	
――――	1825	8	68	「峨眉山下橋に題す」の詩を詠む。	シーボルト事件。
	1826	9	69	島崎の木村家の庵室に移る。	
	1827	10	70	貞心尼（29歳、30歳の説）に会う。(良寛69歳、70歳の説）原田鵠斉死亡。(65歳)	頼山陽日本外史著す。
木村家庵					
	1828	11	71	木村家のために大蔵経碑文を選ぶ。三条大地震見舞の返書を書く。	小林一茶死す。
	1829	12	72	「香積山無縁供養詩」を詠む。貞心尼、良寛を訪ねて応答歌を詠む。	
室時　代					
	1830	天保元	73	秋ころから痢病にかかる。病床にあっても詩歌、書を遺す。	
――――	1831	2	74	正月6日貞心尼らに看取られ入寂。8日葬儀には285名の記帳。馬之助死す。	長岡藩主牧野忠精死す。
				≪天保4島崎の隆泉寺に良寛の墓を泰世がつくる。	
				天保5由之死す。	天保大飢饉が続く。
				天保6貞心尼「蓮の露」を書く。	
				1872明治5貞心尼入寂。(75歳) ≫	